

大学におけるリメディアル教育と 言語表現法の関連について

高崎 みどり

1. はじめに

表題の「リメディアル (remedial=矯正しうる、救済する) 教育」というのは、簡単にいえば、“補習教育”ということで、最近の大学生の学力低下に対する大学側の対応の一環として注目されているものである。

こうした対応が必要になってきたのには、おおよそ以下のような事情がある。選択の幅を広げた結果、受験科目以外は切り捨ててしまうことになった高校のカリキュラム、受験生を減らさないために、受験の必要科目や範囲を減らす大学、多様な入試方法で、学力がさまざまで入学してくる学生達。そして、クッションとしての一般教育が減らされて、学生は低学年のうちにいきなり専門科目にとりかこまれるということにもなり、専門を学ぶのに必要な学力がついていないと、早々と落ちこぼれてしまう場合さえある、といったような現状である。

ここで、「学力」と単に言っているが、その「学力」とは、例えば、医学部に入ったのに、高校で生物を履修していないのでついていけない、というような、科目自体の知識や方法についての習得ができているかどうかを指す場合が一般的には多いし、「学力低下」と論議されるのもこちらの方が中心である。実際に、数学や理科系の科目を補習として履修させる大学もふえてきているようだ。

しかし、実は、本稿で問題にしたいのは、文字どおりの「学ぶ力」の方なのである。すなわち、まずは大学で学問を学ぶために必要な姿勢、基本的な方略のこと、そして、社会に出て職業に就く前に、それらの職業に要求される適性に合わせて自分を吟味し、足らざるところを見い出して、絶えず自ら学んでいくという身構えのこと——それも「学力」なのである。そちらの方

の「学力」も、確実に低下しているように感じられるのである。

例えば、大学には、演習・ゼミナール形式の授業があるが、問題設定や調査の方法などがはじめのうちはわからないのはしかたがないとしても、授業が進んでいってもそれらはなかなか学生の身についていかない。そして、その授業を維持していくために最低限必要な、図書館の利用・活用の仕方、グループでの効率のよい話し合いのやりかた、レジュメ・ハンドアウトの作り方、発表のしかた、発表の聞き方、はたまた、その先にあるレポートの書き方など、ごく基本的なことで担当教員が一から教えなければならないことは実に多い。これらは、先にあげた、大学で学ぶために必要な姿勢・基本的方略に関連した学力なのである。

では、後のほうの、自らの吟味、たえず自ら学ぶ身構えというのはどういうことかと言えば、知的謙虚さ、もっと端的にいえば“知性”ということの有無に行き着くと思う。一般教育もなく、必要単位と資格だけに血眼になる現状では、いろいろな学問分野の厚い蓄積を借りながら、社会で通用するような恃みになる自分自身を作り上げていくことが出来にくいのである。学生の現実でいえば、専門に関係ない分野にも興味を感じたり、教科書・参考書以外の本を読むということが、以前に比べて減っているように感じられる。生涯を通じて何かと支えになる、謙虚に学ぶ身構えというものもまた大切な学力である。

さて、こうした学び方・学ぶ身構えをリメディアル教育で、となると、その形態として考えられるのは、どのような授業であろうか。

私は、自分自身の狭い経験からではあるが、言語表現法を核として、学生の専攻分野を視野に入れつつ展開していく「研究基礎演習」のような授業形態が、リメディアル教育としてあってよいのではないかと考える。そしてそこに指導にあたる教員の専門的興味を投影して、学生自身の専攻とは多少ずれていても、こんな興味深いことがあるのだ、という実感を与えられれば、一般教育の代替としても機能させることが可能になろう。

そこで、まず、この核になると考えられる言語表現法という科目について検討し、合わせて自分自身の実践をも報告しながら、リメディアル教育との

関連をさぐってみることにする。

2. 現行の言語表現法について

まず、現行の大学における言語表現法ないしそれに類した授業の、実際の行われ方を仮に下記のように7つに分けてみた。

- (1) 一般教育的な講義として設定
- (2) 学び方の技法として設定
- (3) 各種の文章の書き方、いろいろな場面での話し方などをひとつとおりに教える場として設定
- (4) コミュニケーション教育として設定
- (5) 各々の専門（あるいはめざす職業）に合わせてアレンジを加えた表現教育として設定
- (6) 文章を書くこと自体を目的として設定（非実用文中心）
- (7) 以上の6種類のいくつかを融合させたもの

以下、これらについて、簡単に説明してみる。

(1) 一般教育的な講義として設定

これは、文芸作品や名文といわれる文章を対象として、鑑賞したり、レトリックを分析したりするもの。いい文章を書くには、まず、いい文章を味読することが大切である、という考えが下敷きになっている。

あるいは、文章論の理論に基づいて、文章の書き方などを理論的に講義するような場合もこれに入るかもしれない。いずれにしても、実作一添削といった作業は伴わない。

(2) 学び方の技法として設定

少し前のものだが、渡辺（1981）では、仏の哲学教育を参考に、学生に自分自身でものを考える力をつけさせるために、テキストを丹念に読み、考え、要約して表現するという作業を「基礎講読」という授業で行ったことが報告されている。言語表現法では、表現の方、すなわち書く

・話すことだけが中心になるように思われがちであるが、受容の方、たとえば感想文を書くため本を読むとか、クラスメートのスピーチを聞く、といったことで、読む・聞くことも同時に行われているのである。また、そうした、文献の読み方、発表の聞き方などについてもトレーニングの必要が言われている。この渡辺（1981）では、具体的作業として、（本を）読む、（その内容について）考える、（その考えたことを）書く、（その書いたものをもとにクラスで発表し）話す、（それを他の学生が）聞く、そして（議論して）話す、という連鎖によって授業が成立している。学び方の技法として、話す・書く・読む・聞くという言語表現法が自覚的に行われていると言ってよいだろう。

(3) 各種の文章の書き方、いろいろな場面での話し方などをひととおり教える場として設定

これは、自己紹介スピーチや、会議の司会のしかた、といったことから、手紙やレポート・論文の書き方まで、実用的な「書く・話す」を教える。実作・添削・講評というプロセスを含むことが多い。

こうした教え方は、結果的にリメディアル教育として要求される内容にかなり近いように思われる。入学したての学生がとまどうことの多い、レポートを書くとか、ノートをとる、発表する、といったことについては、“書く”“話す”こととして、表現法で教えてほしい、と大学側から要請されることが多いし、学生もまた、表現法にそれを期待している場合が少なくない。ゆえに、表現法でこれらを扱えば、おのずからここでいうリメディアル教育に近いものとはなるだろう。

(4) コミュニケーション教育として設定

これは、今、多くの学生がおちいつている問題を、自分達のコミュニケーション能力に問題があるのではないかと、して考えさせるもの。パフォーマンス論や、メディア・リテラシーなど、種々さまざまなかたちで行われていると思われるが、筆者が前任校（医科大学）で経験した教

育を簡単に紹介する。

ここでも、授業中の私語・飲食・携帯の呼び出しなどや、人間関係の悩みによるひきこもりなどがみられたが、それらをコミュニケーションの問題として捉えさせ、話し合いやロールプレイによって、自分でどのような態度・言葉を選択すればよいのかを考えさせるようにした。例えば、少人数の演習で、なかなか発言できず、疎外感を味わっているケースだと、質問や確認の発言を、タイミングや言葉づかいを工夫してすることによってきっかけをつかむように促していく、などといった対応である。また、医学部ということで、1年生からいろいろな実習があり、大学外の人たちとの接触も多いので、いろいろな困難なシチュエーションでどういう態度でコミュニケーションすればよいか、ロールプレイで演じてみて自覚する、などの試みもした。

以前は、敬語を覚えたり、マニュアル化した応対を学んだりしていたが、応用がきかなかった。相手の心理・場の状況などをつかんで適確に判断しコミュニケーションする、いろいろな人のコミュニケーションの仕方を観察し、批評したり取り入れたりする、などの必要を身にしみて感じさせることが重要である。これらの教育も、表現教育ということで、言語表現法担当の教員にまわってきたのである。

(5) 各々の専門（あるいはめざす職業）に合わせたアレンジを加えた表現教育として設定

これも、筆者が経験した前任校の看護学部で、上記の(3)のようなスタイルの言語表現法を担当するにあたって、その材料を徹底的に専門に結び付けてみた。例えば、最初の自己紹介スピーチを看護職志望動機を中心に組み立てる、それをデータとし、インタビューした情報も加えて「看護職を志望する人間はどのような人間か」というテーマで発表する。必要に応じてアンケートや看護学の先生方にもインタビューしたり文献にあたったりするようにアドヴァイス。これには情報処理の先生の力も借りてパソコンを使いこなせるように、またOHPなどのプレゼンテーシ

ョンに必要な機器の操作もできるようにする。これだけでも、インタビュー技術や目上の人にアポイントメントをとる方法や文献探索そのほかの技術が身につく。また、ディベートでは「輸血拒否の患者に緊急輸血することの是非」「男性の助産士の是非」などの切実なテーマでやりあい、説得の文章もそのテーマで書くが、とる立場はディベートの時と逆とする、などを試みた。

医学部においても、上記(4)とは違う授業で、患者が不快や不安を感じる医者のことば（例「しばらく様子をみましょう」など）を列挙して医師の立場からそれをどう見るかを言わせたり、「医学」と「医療」、「患者」と「病人」、「医者」と「医師」などの類義語の違いを考えさせたり、脳死を意識して「死」ということばの定義を書き直させたり、病歴の書き方で、主観的な形容詞や文末などをチェックして“事実と意見”の峻別を教えたり、というような試みもした。

こうしたやり方は、種々の学部や学科でどれくらい行われているのかはつかんでいないが、可能性としては担当教員の工夫しだいでいろいろに展開できるものであると思う。しかし、専門科目の担当者たちの協力と理解が得られるかどうかに成否がかかっていることも事実である。

(6) 文章を書くこと自体を目的として設定（非実用文中心）

これについては、書くことという体験自体に意味を見い出すものである。たとえば半沢（1991）においては、自分史をじっくり書かせるクラスと、文体模倣文や創作童話、和歌口語訳詞などの課題を次々と書かせるクラスに分けて、それぞれが学生にとって文章を考える刺激やきっかけになれば、真の意味での文章力向上につながる、としている。

また、秦（1997）では、理工系大学で、作家が行った、ユニークな授業に学生がよく応え、書くことによって通いあうさまが描かれ、「寂しいか」「自身を批評し、試みに、強いて百点法で自己採点せよ」など多くのテーマが紹介されている。

少しはずれるが、早稲田大学文学部の文芸専修で、作家の三田誠広が

小説を書くことを教えていて、「(小説を) 書くことには、効用がある」し、「(小説を) 書くこと」は教室で教えることができる、とその体験から語っている(「ぼくのリビングルーム」朝日新聞1998/2/8家庭欄コラム)。

(7)以上の6種類のいくつかを融合させたもの

まだこれらの他にもあるかもしれないが、一応、筆者の見聞する範囲を整理すると、こうした分け方になった。こうした言語表現法の実際をふまえて、以下ではそれらを学力向上のためのリメディアル教育としてどう応用展開していくかについて考えたい。

3. 表現法とリメディアル教育の関連について

3.1 設定の時期・段階についての提案

リメディアル教育の設定の時期については、低学年と高学年を、そして段階については基礎と応用の2段階を考えたい。

まず低学年の基礎の段階について。リメディアル教育の基本的な考え方としては、大学に入る以上、当然大学教育に堪えられる力がついていて然るべきだが、それが無い場合、学生の自主性にまかせるよりも、大学側が補習というかたちで、それを提供すべきである、ということなのである。たとえば専門についての基礎的な常識程度の知識・関心のほかに、ノートをとる、レポートを書く、図書館などを利用して調べものをする、調べたことをきちんとわかるように口頭発表する、というような、少し前であれば、ことさら教わらなくとも自然に身につけていたようなことが欠落している場合、授業について行けなくなる可能性が高い。であるから、本来の講義・演習とはちがうところで、早いうちにそれを手当てしなくてはならないのである。

そこで、本稿「はじめに」で述べた「大学で学ぶために必要な姿勢・基本の方略に関連した学力」をつけるために、「研究基礎演習」のようなものを入学直後から行い、大学の授業に抵抗なく入っていけるような、オリエンテ

ーション的な機能を持たせることが必要になってくる。

そして、これで、完全に矯正しうるかということ、学年がすすんでも、いや、すすめば、また別の学力不足の問題がうかびあがってくる可能性がある。そこで、次に応用の段階が必要になってくるのである。3・4年生の時期に「研究応用演習」のようなものを設定し、職業や志望に合わせたコミュニケーション技法や、社会人・知識人としての知性、すなわち本稿「はじめに」で述べた「生涯を通じて何かと支えになる、謙虚に学ぶ身構え」を身につけさせたい。大学と社会のギャップはいまだに大きく、ソフトランディングを、という配慮でもある。

3.2 内容についての提案

さて、そうした授業で何を具体的に内容とすればよいのであろうか。「言語表現法を核に」と言ってきたが、2章で紹介したように、現行の授業内容は多種多彩である。どこをどう工夫して取り入れるべきか、何を付け加えるべきか、今は手探り状態である。

1つの提案としてであるが、まず1年入学後の「研究基礎演習」では、上記項目で言えば、「(4)コミュニケーション教育」と「(3)各種文章の書き方、いろいろな場面での話し方」のうちの、大学教育で最低限必要なものをピックアップして行う。もちろん、ノートの取り方、発表の仕方、レポートの書き方などは、必須の事項として含まれるだろう。必要に応じて(2)学び方の技法のような方法を取り入れたり、情報の洪水の中でのメディア・リテラシーや大学内外でのマナー教育もふくめなければならないような場合も出てくるかもしれない。

ここで問題なのは、たとえば、「ノートをとる方法は～」 「レポートの構成は～」と、抽象的に解説するだけでは、あまり効果がないということである。できれば実際に何か講義をしてみて（学生の専門に関係なくてもよいが、学生が興味をもって聞けて、1時間程度で完結する内容がよい）ノートを取らせ、提出させて、点検し、講評する方がよい。それに続けて、その講義の中から興味や疑問をもったところを学生が自分で調べて、短いが構成のしっか

りしたレポートを書く。そのプロセスで書き方の実際を教え、同時進行で授業中にレポート作成作業をさせて個別指導する。提出させて講評し、次にそれをもとに口頭発表に仕立てさせてレジユメの書き方や発表の技術を教えていく——といった、興味を喚起できる中身を伴った、作業経験を含むことが是非必要である。

そして、必修であって、全員が同じレベルまで到達すること、半期程度で集中してやってしまうこと、教員が頻繁に点検・添削・講評などができるように、少人数（20人程度）であること、などが求められる。

次に3年生ないし4年生において「研究応用演習」として行うとすると、その場合はまた、別種の内容が要求されるだろう。上記項目で言えば、(5) 各々の専門（あるいはめざす職業）に合わせたアレンジを加えた表現教育、ないしは(6)書くことそれ自体を目的とする、等の内容を考えてみてはどうであろうか。これらは、1年入学直後には、まだそうした自覚も要求も学生には乏しいので、「研究基礎演習」では取り上げにくいものである。しかしながら、3学年4学年で、専門科目を学び、ゼミ論や卒業研究に取り組みながら就職にも備える中では、またいろいろな種類の表現についての知識の必要が、感じられてくるのではあるまいか。

たとえば、本格的な論文の読み方・書き方のトレーニング、研究・リサーチに必要な情報処理法、あるいは、教員志望者や教育実習にむけての授業運営法をやってもかまわないし、採用試験のための面接トレーニングのようなものもいいと思う。純粹に自分を見つめるため（今の言葉で言えば“癒し”のため）創作を試みるクラスがあってもいい。各大学や専門分野のリソースを生かして、さまざまの工夫が可能であろう。

この授業は、選択必修ないし選択で、異なる内容のいくつかのクラスから選べるのが望ましく、全員を同じレベルにというのではなく、各自の到達目標を個別に達成させるのがよいだろう。半期よりももっと短いタームで、複数のものを組み合わせてとれるようにできればいいと思う。

4. おわりに

以上、1つの提案として述べてきた。リメディアル教育というと、数学や理科といった、科目自体のレベル揃えという面が注目されやすいが、学ぶ力という意味での学力不足、それに伴う技能や訓練の不足もまた深刻な問題である。そのことを日頃感じていたので、言語表現法という従来からある科目の、蓄積されてきた種々のノウハウを活性化して、リメディアルという視点から見直してみた。

なお、筆者は現在の勤務校（明治大学商学部）で、言語表現関連科目として、調査法や発表技法習得を目的とする「基礎演習」（1年生・半期・必修）、レポート・論文などを書く技法の習得を目的とする「文章表現」（1年生・半期・必修）を担当している。加えて、2年生の「教養演習」（通年・選択）も担当しており、学生の希望で「若者とことば」をテーマに、現在ゼミ・レポートを作成中（「商学教養セミナー」第31集に掲載予定）である。これらについても触れるべきだが、この4月に着任し半年を経過したにすぎない現時点では、残念ながら報告すべき内容が整っていない。次の機会に送りたいと思う。

筆者の狭い経験や見聞に依拠するもので、不十分の謗りをまぬがれまい。言語表現法のありかたも、実際にはもっとさまざまな内容を、各担当者の方々が工夫してあたっておられるであろう。また、補習教育という点や、上級レベルの表現教育といった視点で、日本語教育の方が先行しているのではないかとも思われる。これを機会に皆様に御教示を賜ることができれば、あるいは、情報交換などができれば、幸いである。

引用文献

秦 恒平（1997）「東工大『作家』教授の幸福」平凡社

半沢幹一（1991）『『文章表現法』授業実践報告』「共立女子大学文芸学部紀要」37

渡辺一民（1981）「大学で読み書きを教える」『文学』9月号 岩波書店